

Title	ユルゲン・クチンスキー著 高橋正雄・中内通明訳 ドイツ経済史
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.9 (1955. 9) ,p.726(76)- 729(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19550901-0076
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550901-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の歴史的現實性が問題とされねばならぬであろう。若し彼の立場から、理論の有意義性即ち現實の説明の爲の有用性によつて、かかる歴史的現實性が考慮されるとするならば、有意義な理論の假定の現實性が問題とならざるを得ないであろう。又彼の見解は社會科學と自然科学の類比的な立場に立つものである。その事は實驗の可否が兩科學を決定的に區別するものではないと云う考え方、及びいわゆる説明と理解とは原理的に兩科學を區別するに足るものではないと云う考え方において明らかである。その意味においては非ウェーバー的であり、むしろメカニカルな經濟現象の説明の爲の理論を方法論的に基礎付けるものと云えよう。かかる自然科学的社會科學觀は、前述の理論の歴史的妥當性を考慮しない見解と共に、歴史的社會科學としての經濟學の方法論としては當然批判されなければならぬと思う。彼の主張する如くならば、經濟の歴史的發展と云う現象は、その理論の中に入るべき餘地がなくなるのみならず、理論的發展そのものが單に「靈感、直観、發明の創造的行爲」によるものと考えられ、歴史的現實的發展との相應關係を見る事が出来なくなるであろう。要するに彼の見解は最近の近代經濟學的方法論的考察と云うべく、又そこにその限界が存すると思う。

(富田 重夫)

たい謎と不幸な方向轉換に富むドイツの歴史にとつてさげがたかつたというその宿命感、すでに彼の先輩であるヤコブ・ブルックハルトに見られたところであつた。「世界史における幸および不幸」(Über Glück und Unglück in der Weltgeschichte)を説くブルックハルトの思想には、ドイツの歴史の特殊性を世界史のなかに把握しようとする努力が見られるが、しかしドイツ民族がかつてたどつた破滅と戦争への道は、果してさげがたい宿命であつたと云えるだろうか。

戦後十年、ムッソリーニとヒットラーは亡び、ファシズムはまったくその姿を消したといわれているにもかかわらず、民主主義という粉飾のもとに、新しいファシズムはすでにその姿をあらわしはじめている。ファシズムが、ドイツにとつてこよなき地盤であつたように、われわれの祖國日本にとつても、その危険がないとは云えないのではないだろうか。しかしながらドイツ型ファシズムとしてのナチズムを増大させた精神的な背景が、ドイツの後進性と非合理主義であつたとしても、それはあくまでもひとつの條件にすぎない。もつとも基本的なモチーフは、ドイツ資本主義發展の特殊性のなかに求められねばならない。ユルゲン・クチンスキーは「ドイツ經濟史」(原書のほんとうの名は、「一八〇〇年から一九四六年までのドイツ經濟の動き」というこの書を通じて、ドイツ經濟の歴史的な發展を明らかにすることによつて、ファシズム出現の背景となり、そのにない手となつた階級の經濟的政治的な基盤を明らかにしている。

譯者はしがきによれば、ユルゲン・クチンスキーは、一九〇四年

書評及び紹介

ユルゲン・クチンスキー著
高橋正雄・中内通明譯

『ドイツ經濟史』

ハンガリヤ出身のすぐれた思想家ジェルジュ・ルカーチは、その最近の著作「理性の破壊」(Die Zerstörung der Vernunft, 1964)の第一章、ドイツの歴史的發展の二、三の特徴について、の冒頭につきのように云つている。「一般的にいうと、ドイツ民族の運命をして悲劇は、彼らが餘りにもおかれて近代の市民的發展に加つたことに基づいているといえる……これまでの——近代の——ドイツ史にとつて決定的なモチーフは資本主義のおくれた發展と、そこから生じた社會的、政治的イデオロギー的なすべての結果とにある、ということをおぼろげに見出すであろう」と。ドイツ資本主義のたちおくれと、その結果としてドイツ民族がになわなければならなかつたいたましい運命——二度の大戦にはさまれた短い安定期につづくおそるべきファシズム支配——については、すでにフリードリッヒ・マイネッケが、「ドイツの悲劇——考察と回想」——のなかで、更にいたましく説いている。ルカーチもマイネッケも、第一次大戦後に成立したいわゆるワイマル共和国の崩壊をもつて、ドイツ民族に宿命的な非合理主義が、一層その崩壊に拍車をかけたと言張しているかのようである。云うまでもなく、マイネッケの考え方——第一次大戦後、ドイツ民族がたどつた不幸な運命は、解きが

九月一七日、ドイツのエルバーフェルトに生れた。彼の父もまた經濟學者であつた。クチンスキーは、ベルリン、エルランゲン、ハイデルベルク、ワシントンの各大學に學び、經濟統計學者として活躍していたが、一九三三年、ナチスが政權をとり、やがて社會主義政黨や労働組合を禁止するや、非合法運動に入り、三六年にはイギリスに逃れ、精力的な著述活動をつづけて、ファシズムと闘つた。第二次大戦が終るとともにドイツに歸り、四六年にはフンボルト大學(もとのベルリン大學)の經濟史の教授に就任し、現在に及んでいる。その著書は多く、最近出た「ドイツにおける労働者の状態の歴史」(Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland, 1961-1962)をはじめ、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカなどの労働者階級の状態にかんするものを、數多く出している。本書は、つぎの十六講から成つていゝ。第一講、なぜドイツ經濟史を研究するのでしょうか、第二講、一八〇〇年頃のドイツ、第三講、經濟革命、第四講、進歩と反動、第五講、一八四八年の革命の經濟的政治的前史、第六講、初期産業資本主義の終り、第七講、ドイツ資本主義の第二期への移行、第八講、一流の資本主義國としてのドイツ、第九講、獨占資本主義の第一段階、第十講、戦争・革命およびインフレーション、第十一講、生産設備の近代化とファシズムへの發展、第十二講、ファシズム經濟の構造、第十三講、ファシズム經濟(一九三三—一九三七)、第十四講、ファシズム經濟(一九三八—一九四五)、第十五講、「新秩序」、第十六講、新ドイツ經濟再建の問題。以上の全部にわたつてその内容を紹介する必要もないし、またわたたくしの目的でもないが、ただ、ファシズムをささえた地盤は

七七 (七二七)

ドイツ經濟の發展のなかに、どのようにして形成されたか、この點について、クチンスキーの云うところをきいてみようと思う。

資本主義が發展するための條件として、まず第一に、あらゆる生産手段をうばわれたプロレタリアートが存在しなければならぬこととは勿論であるが、一八〇〇年初頭のドイツは、封建的な束縛が生産力を窒息させ、プロレタリアートは、まだ階級として成熟していなかつた。進歩的勢力といへば、何といつてもインテリと市民層のなから、第二にマニユファクチュアと機械工業の方面からでてきたのであつた(二八頁)。やがて一八一一年九月農奴解放にかんする勅令が出され、農民が農奴制という桎梏から解放されたが、しかしこれは、支配者が、情勢の力におされて經濟改革を行つたことは記憶されねばならない。封建經濟の組織から資本主義經濟の移行にあつて、そのコースにはつぎの二つがありうる。ひとつは、革命によつて、封建的な勢力から政權を奪取したブルジョア階級が、みずからの力によつて經濟的な改革を行う場合であり、いまひとつは、封建勢力が根強いところでは、ブルジョア階級が封建勢力を打倒する代りに、これと妥協し、或はその侍僕となつて資本主義化をおしすすめる場合であつて、この場合には、政治的な革命はまったく不徹底におわる。イギリス、フランスなどは前者であり、ドイツと日本とは後者によつて代表される。そしてドイツは、何といつても、この古典的な實例を提供してくる。

一八〇七年から一五年までの間に、封建的勢力の代辯者ユンカー、エルベ河以東の大土地所有者ユンカーは、農業に資本主義的生産様式をとり入れたのであつた。ブルジョア勢力の力が弱かつた

ドイツでは、大土地所有者としてのユンカーは、打倒されることなく、外貌は近代的な假面をまといながら、たましいは舊態依然たる資本主義的ユンカーとなつた。「十九世紀のドイツ・ブルジョア階級の歴史は、彼らが經濟上の利益をうる代償として、政治上は依然ユンカーの下僕たるに甘んじたことを特徴としていたのである」(五三頁)。やがて一八一六年から一八四〇年までの期間に、ドイツ資本主義は發展したが、ユンカーはますます地歩を固め、一八四八年の革命までの間に、農業について機械工業生産が資本主義的に發展し、これを經濟的基礎としたブルジョアが出現するとともに、工業プロレタリアートの大軍があらわれるに至つた。そしてこれが農業プロレタリアートと同盟して、反動勢力と對抗する時機がちかづきつた。

すなわち、一八四八年の革命がそれであるが、この革命は、大體においてつぎの三つの危機を特徴としていた。つまり、第一は、勢力を増大しつたブルジョアと、封建的な支配をつづけていたユンカーとの對立にもとづく政治的危機であり、第二には、生産を上昇させ、搾取を引上げるための外延的方法が効果を失ははじめたことにもとづく生産および搾取における基本的危機である。そして最後に恐慌が加わる(六七頁)。

しかし、ユンカーとしては、大ブルジョアのゆき方よりも、大衆のそれからうけた印象が深刻であつた。ユンカーと大ブルジョアが共同戦線をはつて、プロレタリア階級に對抗したとはいへなかつた。大衆はあまりにも弱く、多くの場合、地方的にしか組織されていなかつたので、またこれらの階級のどのひとつの場合にも全國的

な指導者がなかつたので、これらの階級の運動は貫徹されずバラバラに分裂し、しばらくして鎮壓されてしまつた。大衆の革命に對抗

するこの闘争に、反動勢力は結集したが、大ブルジョアと中産階級の上層は分裂していた——これは全く當然のことであつた。なぜならば反動勢力の闘争は、生存のための闘争であつた……大ブルジョアはこれとちがつていた。日程に上つた問題に對する個々のブルジョアの態度を規定したのは、労働者階級が將來權力を要求するようになるのを阻止すること、ユンカーに對する闘争との、どちらがさしあたり重要であるかということでした……當面ながら最も重要であるかを正しく知つていた人は一人もいなかったか、誰れも見當ちがいのことを決定的に重要だと思ひこんだかのいずれかであつた。こうしてブルジョアの陣營は分裂し、半封建的ユンカーが闘争の勝者となつた。一八四八年の革命は、エルベ河の砂地にきえて、ユンカーはもと通りに支配をつづけ、全ドイツの反動勢力への支柱となつたのである(七七—七八頁)。

ブルジョア階級が勝利すべきこの革命に、半封建的ユンカーが勝利をせめたことは、これからのドイツ資本主義の歴史に決定的な特徴をあたえた。のちに出現したファシズムが、このユンカー的なものをその支柱として勢力をはつていつたことは云うまでもない。もとにもどらう。この革命の失敗は、大衆に絶望感をあたえ、インテリゲンチヤの間には、非合理的な思想が發生した。云いかえれば、一八四八年の遠い時代にすでにファシズムの經濟的支柱と思想的地盤は生れたといえよう。ファシズムは普通に、二十世紀の産物であると云われるが、しかしドイツにおいては、すでに一八四八年の革

命の失敗という歴史的事件のあとに、その條件がつくられていたとはいへないだらうか。

(註一)「思想」三月號、四月號には、この第一章の全譯がのせられてゐる。

(飯田 鼎)

スコット・A・グリーア著

『社會組織』

本書はチャールズ・H・ペイジ教授監修の下に刊行された“*Days Short Studies in Sociology*”の一冊である。此の叢書は社會學研究の小冊子二十を以つて構成せられているアメリカ社會學の縮圖とみてよいと思うが、我々が本書をとり上げた所以は戰後とみに問題とされた産業社會における社會組織について、之が如何に理解されているかを識るためであつて、我々が研究對象としてゐる企業の經營組織認識の一助ともなればとのささやかな意圖を持つからに外ならない。

先ず本書の構成についてみると、第一章、社會組織・社會活動の手段、第二章、社會組織と文化模型、第三章、社會諸集團の構造、第四章、人間諸集團の主要型態、第五章、組織形態變遷誌となつて